

# 恵泉女学園大学教職課程の教育成果

—教育理念の特色と卒業生の教育観を事例として—

水上晃実・岩佐玲子

## Educational Outcomes of Keisen University's Teacher Training Courses : Characteristics of the Educational Philosophy and Graduates' Views on Education as Examples

Terumi Mizukami, Reiko Iwasa

### 要旨

本稿は、1988（S63）年の開学とともに設置された恵泉女学園大学教職課程の35年の歩みを振り返り、恵泉教育の真価を教員養成の観点から明らかにしようとする試みである。そのために、本稿では2024（R6）年現在の教職課程の目的、学修内容と方法の特徴、教職履修生へのサポート体制、目指す教師像等を記した。その上で、現在中学や高等学校で教師として活躍する卒業生13名が綴った、恵泉女学園大学での学びと教師としての在り方についての手記を紹介している。

本学教職課程の特徴は、大学内だけの学びに留まらず、体験を重視しながら、地域の学校および福祉施設や他機関との関わりを通して人格を磨くとともに、実践的な教師力を身に付けることにある。これは、いのちへの畏敬の念と人権感覚を有する温かな人間性、確かな指導力、高い専門性とコミュニケーション能力を有する、教育愛と奉仕の精神に優れた教師を養成するためであり、世界の平和の実現に貢献する女性を育成するという本学園の教育理念に基づく本学ならではの教育方法である。現役の中学や高校の教師として活躍する卒業生13名の手記からは「聖書」「国際」「園芸」という恵泉教育の3つの礎に基づく「愛」「平和」「いのち」の大切さを次世代に伝えようとする使命感が共有されていること、対話的な深い学びや個別最適な学びを実現

しようとする姿勢が伺える。

キーワード：恵泉教育、教職課程、教師のコミュニケーション能力、目指す教師像

*Key Words* : Keisen Education, Teacher Training Course, Teachers' communication skills, Images of an ideal teacher

## 1. はじめに

恵泉女学園大学は、開学理念である「神と人ともに仕え、自然を慈しみ、世界に心を開き、平和の実現のために貢献できる女性」の育成を目標に、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーに基づき、1988（S63）年の開学時から一貫して少人数教育を守ってきた。それは、一人ひとりの学生の能力と人間性を育て、個性に寄り添いながら、世界の平和を創る女性として育つためのリベラルアーツ教育に注力するためである。その教育の成果は、開学から30年以上を過ぎた現在、国内はもちろん世界の様々な場所で幅広く社会の福祉に貢献する有為な女性を輩出したことに表れている。

とりわけ開学年度入学1期生から履修が開始された教職課程での中学校・高等学校教員免許取得者は、国語科317名、英語科381名であり、両科目を合わせて698名となっている（表1、学科別人数の内訳は表2参照）。さらに、各年度とも、履修生の3割から5割が教職や教育関連の職業を選択し、現在も教育現場で活躍している。また、卒業生の傾向として顕著な点は、卒業後に特別支援教育や小学校教諭、保育士等の資格を取得し、特別支援学校、保育園、障害者施設等に奉職するケースが少なくないことである。さらに近年は、英語科や国語科にとどまらず、家庭科や体育科など他教科の免許取得を目指す卒業生や、子育てを経て地域の不登校児童生徒のための適応教室、学童クラブ、特別支援学校等で指導員として勤務する卒業生も増える傾向にある。

そのような中、大学を取り巻く諸事情から再課程認定申請を見送るという時期が生じた。しかし、学園創立者河井道の教育理念、および受験生・保護者・地域社会や関係諸団体からの教職課程再開の要請、ならびに教員免許取

得者の卒業後の社会貢献を踏まえ、教員養成は本学の社会的使命であるとして、文部科学省に教職課程の設置申請を行い、2023（R5）年4月1日より教職課程が再び開設することとなった。

以上の経緯と実績に基づき、本稿では、本学教職課程の目的、国語科および英語科での学修内容と方法の特徴、教職履修生へのサポート体制、本学教職課程が目指す教師像を纏める。また、現役の教員として活躍する卒業生から寄せられた文章により、彼らが恵泉女学園大学および本学教職課程で何を学び、それを現在どのように活かしているのか、また、今後の教師生活で何を大切にしたいと考えているのかを紹介する。

表1. 教員免許状（中学一種、高校一種）取得人数一覧

※人数には中学一種、高校一種どちらか一方のみ取得者も含む

入学年度	免許状取得 年度 (卒業年度)	教 科		合計(人)	
		国語科(人)	英語科(人)		
1988	1991	33	41	74	
1989	1992	18	20	38	
1990	1993	22	31	53	
1991	1994	22	29	51	
1992	1995	25	26	51	
1993	1996	20	31	51	
1994	1997	19	31	50	
1995	1998	9	16	25	
1996	1999	13	13	26	
1997	2000	16	21	37	
1998	2001	9	18	27	
1999	2002	9	15	24	
2000	2003	10	11	21	
2001	2004	5	9	14	含む:科目等履修生2
2002	2005	5	3	8	含む:科目等履修生2
2003	2006	7	6	13	
2004	2007	12	2	14	
2005	2008	7	7	14	
2006	2009	5	7	12	含む:科目等履修生1
2007	2010	6	6	12	
2008	2011	5	4	9	
2009	2012	1	5	6	含む:科目等履修生1
2010	2013	6	4	10	
2011	2014	1	5	6	含む:科目等履修生1
2012	2015	6	4	10	含む:国語科専修免許取得者(院)1
2013	2016	8	5	13	含む:国語科専修免許取得者(院)1
2014	2017	9	5	14	
2015	2018	5	4	9	
2016	2019	2	2	4	
2017	2020	1	6	7	
2018	2021	1	10	11	
		317	381	698	

\*2001年度以前は国語科＝日本文化学科 英語科＝英米文化学科

表2. 学科別人数内訳

学科別人数内訳

卒業年度	日本文化 学科	英米文化 学科	国際社会 文化学科	合計
2002年度	9	13	2	24
2003年度	10	11	0	21
2004年度	5	8	1	14
2005年度	5	3	0	8
2006年度	7	6	0	13
2007年度	12	2	0	14

含む:科目等履修生2

含む:科目等履修生2

卒業年度	日本語日本 文化学科	英語コミュニ ケーション学科	文化学科	国際社会 学科	人間環境 学科	人文学 研究科	合計
2008年度	3	6	4	1	0		14
2009年度	3	7	2	0	0		12
2010年度	6	6	0	0	0		12
2011年度	5	4	0	0	0		9
2012年度	1	5	0	0	0		6
2013年度	5	4	1	0	0		10
2014年度	1	5	0	0	0		6
2015年度	5	4	0	0	0	1	10

含む:  
科目等履修生1

含む:  
科目等履修生1

含む:  
科目等履修生1

(専修免許)

卒業年度	日本語日本 文化学科	英語コミュニ ケーション学科	歴史文化 学科	国際社会 学科	人間環境 学科	社会園芸 学科	人文学 研究科	合計
2016年度	7	5	0	0	0	0	1	13
2017年度	9	5	0	0	0	0	0	14
2018年度	4	4	1	0	0	0	0	9
2019年度	1	2	0	1	0	0	0	4

(専修免許)

卒業年度	日本語日本 文化学科	英語コミュニ ケーション学科	国際社会 学科	社会園芸 学科	合計
2020年度	1	4	2	0	7
2021年度	1	6	4	0	11

2. 本学教職課程の目的

本学教職課程の目的は、いのちへの畏敬の念と人権感覚を有する温かな人間性、確かな指導力、高い専門性とコミュニケーション能力を有する、教育愛と奉仕の精神に優れた教師を養成することによって、人々の心の平安と世界の平和の実現に貢献することである。

国語科免許の取得を目指す学生は、日本語学、日本文学、日本史学、社会学等を中心に修得し、英語科免許の取得を目指す学生は、英語学、英米文学、英語圏の歴史と文化及び社会についての幅広い知識と見識を養う。そして、

両科目とも、地球全体が抱える問題を自分事として取り組む体験を積みながら、主体的・対話的な学びの中で自己教育力を高め、生徒一人ひとりを大切に、共に歩み、人からも仕事からも常に積極的に学び続ける人間性豊かで指導力の高い教師を世に送り出すことを本学教職課程は目指している。

平成31年の学習指導要領の改訂により、教師が何を教えるかという観点から移行して、児童生徒が学びを通してどのような力をつけるのか、その力をどのように活用するのかという観点が浮き彫りにされた。そして、教育によって育むべき三つの資質として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」が示された。また、国語科、英語科ともに「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニング）の実現に向けた授業改善が喫緊の課題となっている。

これに伴い、本章では国語科および英語科の学習指導要領における目的や変更点の概略に触れた上で、本学教職課程で実施している具体的な教育方法を科目ごとに述べることとする。

## 2.1 本学教職課程（国語科）の学び

学習指導要領国語科においては、「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味づけること」を「言葉による見方・考え方」と位置づけられている。つまり、国語科においては、中学・高等学校ともに、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語での確に理解し効果的に表現する資質・能力」を育むことが求められているのである。そして、言葉への自覚を高めることが国語科の本質的な意義であると明示され、語彙指導の系統化をはじめとした改善がなされている。さらに、高等学校国語科では科目構成が「現代の国語」「言語文化」「倫理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」と変化し、わが国の言語文化に対する理解に加え、生きるための言語能力の育成としての「論理的・批判的に考える力」や「創造的に考える力」の涵養に重点を置いていることが分かる。

このような社会の変化と教育的要請に対して、本学では、次のような実践を行ってきた。まず、少人数制による研究発表や討議を積極的に取り入れている。そして、対話を重視した活発な言語活動による主体的な深い学びの場を広げ、日本語での発信力強化に繋がる、スピーチ、ICTを活用したプレゼ

ンテーション、ディベート、ディスカッションなどの言語活動を精力的に行っている。これらを通して、アウトプットする統合型の言語活動を推進し、学生の日本語コミュニケーション能力を高めるための活動を重ねている。

## 2.2 本学教職課程（英語科）の学び

学習指導要領英語科においては、これまで「聞くこと」「話すこと」「書くこと」「読むこと」の4技能の習得が目的とされてきたが、「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」に分化し、4技能5領域に変わり、「聞くこと」「話すこと」のコミュニケーション能力が重要視されるようになった。しかも教材にはSDGsが含まれ、国際社会が抱える課題に対して主体的に取り組む態度の養成も急務となっている。

さらに、中学校英語科は、小学校英語の習得が前提であり、これまで高等学校の範囲だった文法事項の一部が中学校の学習内容に加わっている。この新しい「外国語科（英語）の目標」では、実際のコミュニケーションにおいて目的や場面、話し手や聞き手の意図や心情に応じた適切な表現や、相手の背景にある文化に対する理解や配慮とともに、主体的・自律的に英語を用いて対話する態度の重要性が示されている。

また、高等学校英語科では、外国語コミュニケーションに対する見方・考え方が整理され、「三つの柱」に基づいて目標が明確化された。この新しい「外国語科（英語）の目標」では、実際のコミュニケーションにおいて目的や場面、話し手や聞き手の意図や心情に応じた適切な表現や、相手の背景にある文化に対する理解や配慮とともに、主体的・自律的に英語を用いて対話する態度の重要性が示されている。

以上を踏まえ、本学では、ペアワークやグループワークによる学習形態を重視し、英語での発信力強化に繋がる、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどの言語活動を活発に行っている。特に、国語科同様、ICTの活用も積極的に取り入れ、実際に教員になり学校現場に立った際に、すぐに発揮できるICT活用スキルの習得を目指している。

## 3. 本学教職課程の特徴

本章では、本学教職課程が学びの方法として重視している3つの側面を述べる。本学ではとくに他と関わることで得られる学びに重きを置いてきた。

それは、教師という仕事が決して机上の学びに留まるものではないからである。また、教師に必要な力量として、コミュニケーション能力が欠かせないということも重要な視点である。

教職に就いたとき、生徒・保護者・地域の方々・同僚と円滑なコミュニケーション関係を築きながら教育活動にあたることが求められる以上、教職課程において、他と関わりながら学びを得るという体験は必須である。

このことを鑑み、本学が重視する他と共に学ぶということを具現化した3つの教育方法が以下である。

#### ・仲間と共に学ぶ

生徒の発達段階や習熟度に応じた授業の構成、教材の工夫、対話的学びを促進するための技術とICT機器の活用方法など、グループワークや討論、ロールプレイなどの共同作業を通して、仲間と対話しながら修得する。

#### ・出会いから学ぶ

教育関係の課題図書を読んだり、教育現場でのインターンシップやボランティアを行ったりすることを通して、ロールモデルとなる教師と出会い、具体的な場面でプロの仕事に触れながら、自身の目指す教師像の構築に取り組み、教職への意欲を具体化する。

#### ・体験から学ぶ

スクールインターンシップやボランティア活動、地域の学校で指導補助、介護等体験事前学習のための介護施設や特別支援学校の訪問を行う。これは、現場に身を置くことで気づいた教職の意義や教師の役割を通して自らの課題を発見し、理論や指導法と関連付けて主体的に学ぶためである。物事の本質を深く捉え、粘り強く考え、解決の道を模索しながら教育課題に対する洞察を深めることにも繋がる。

本学では、このように他と関わることのできる実務としての学びの場を用意することで、教職の意義と役割を体験的に学ぶことができると考えている。そしてこれらの学びは、自己省察の機会となり、教わる立場から教える立場への意識の転換を促し、積極的で主体的な教職への取り組みの強化に繋がる

と考えている。

#### 4. 教職課程履修条件とサポート体制

本学教職課程では、1年次春のガイダンス時に、教職課程履修の条件として1年間で達成すべき課題を示している。それは、実用英語技能検定（英検）／日本漢字技能検定（漢検）2級の受験と合格、福祉施設や特別支援学校での2日以上ボランティア体験報告、教育関連図書のブックレポート提出である。これらの課題に取り組むことを通して教職に対する意欲と資質に関する自己確認を行い、2年次以降は以下の学修環境の中で一人ひとりの学生の進路選択をサポートしている。

##### ・漢字検定・英語検定および教員採用試験対策講座

定期的に英検/漢検対策講座が開かれ、2級～準1級に合格するための支援を行っている。また、教員採用試験対策講座（専門教科、教職教養、論作文・面接対策）を定期的に開講している。

##### ・教職ライブラリー

教職ライブラリーは、教職課程履修生が自由に立ち入りできる図書室である。教科書、参考書、学習指導要領などは自由に閲覧でき、模擬授業のための指導案作成に必要な教材・教具・機器も備えている。教員採用試験や求人情報も掲示・展示され、常時解放されている学習室でもある。

##### ・教職課程教員との面談

教職課程科目の学修状況を確認するとともに、必要なアドバイスを行い、学生それぞれに合った学びのサポートを行っている。また、学修面のみならず、進路の相談にも乗り、学生一人ひとりに寄り添い、彼らの希望を尊重した助言を心掛けている。

卒業所要単位より多くの科目を履修しなければならない教職課程ではあるが、上記サポート体制により、学生が安心して教員免許取得を目指すことが出来るよう、担当教員全員で連携を取りながら学生を支援している。



## 5. 本学が目指す教師像

これからの教師に求められる資質と力量は、教職に対する強い情熱（使命感と子どもへの愛情など）、教育の専門家としての確かな力量（生徒理解、生徒指導、学習指導の力など）、総合的な人間力（社会性、常識と教養、対人関係能力など）はもちろん、研究と修養に努め専門性の向上のために学び続ける姿勢および、「チーム学校」の一員として役割と責任を果たす協働性などである。

これを受けて本学では、教職と教科の専門性を高めるとともに、総合的に学んだ知識を統合する力、知識を活用し新しいものを創造する力、さらにその過程で育まれる思考力・判断力・行動力を高めることに注力している。そして、全人的に教育に関わるための専門職としての力量形成を目指している。その為の基盤となるのは、キリスト教の「隣人愛」に基づいた奉仕の精神、多様性や協働性を尊重した共生の精神、ならびに時代の変化や課題に柔軟に対応し物事の本質を捉えて課題解決の道を切り開くための論理的思考力と批判的思考力の涵養である。以下に、本学の教育理念に基づいた目指す教師像を挙げることにする。

- ・教師としての専門性、生徒理解、指導力、協働性に優れた教師
- ・課題や現状を把握し、解決や改善のために粘り強く考え、行動する教師
- ・生徒と共に歩み、生徒を生涯に渡って見守り続ける、教育愛に満ちた教師
- ・生徒や周囲の人々の心に寄り添い、自己を愛するように他者を尊重する教師
- ・世界や社会の動きに関心を持ち、常に学び続ける教師
- ・偏見や差別に立ち向かう、人権感覚に優れた教師
- ・自然を慈しみ、いのちを尊び、平和のための奉仕者として喜びをもって働く教師

以上の目指す教師像を各教職科目や活動を通し、学生たちに明確にイメージさせながら、カリキュラムを進めることで、教員免許取得後、すぐに教壇に立つことが出来る教師力の養成を心掛けている。

## 6. 現任教員として活躍する卒業生の思い

本学教職課程で教員免許を取得し、現在、公立学校および私立学校の中学、高等学校において教育の仕事に従事している卒業生13名に、本学教職課程での学びを振り返り、印象に残っている学びの内容や現在の仕事に活かされている事柄を綴ってもらった。今後の展望等を含めて800字程度にまとめられた文章をそのまま紹介する。卒業年度と氏名のアルファベット順に掲載する。

### ① 『『生涯就業力』のモデルを目指して』

東京都公立中学校 英語科 K. Tさん (1992年卒業)

「限りなく優しい先生になりたい」そんな思いを胸に32年前八王子市内の中学校に赴任しました。幼い頃からの夢が実現した瞬間でした。それは紛れもない、恵泉女学園大学のかげがけのない4年間を抜きにしては、成しえなかった夢であると感じています。恵泉女学園大学の学びで強く影響を受けたものは、「聖書」「園芸」「教職課程」です。これらの学びを通して『前向きに人生を生きる力』『人間関係を良好に保つコミュニケーション力』『良い巡り合わせを惹きつける力』『しなやかに生きる力』『人を大切に育てる力』の基本を培いました。特に、学長である大日向先生、岩佐先生、ゼミ担当のLaw先生の授業は強く印象に残っています。

昨年度、7度目の異動を経験しました。なんと、異動先は32年前に初任で着任した中学校。同時に新しく特別支援教室拠点校を立ち上げるスタッフの主任という役目を担いました。これも何かのご縁、巡り合わせと強く感じました。今まで出会った恩師たちから、「初心に帰りなさい。最初に思い感じた純粋な気持ちに戻りなさい。」とされている気持ちになりました。通常の学級担任・英語科担当25年、特別支援学級固定級7年の経験を活かし、日々発達障害を抱える生徒一人一人の、生活上や学習上の困難さを改善するために、在籍学級や家庭と連携しながら指導を行っています。

恵泉女学園大の先生方は、私たち1期生を4年間宝物として大切にそして丁寧に育ててくださいました。そして、卒業後も岩佐先生は、子育てと仕事の両立に悩む私を温かく見守り、気持ちを共有し、励ましてくださいました。感謝申し上げます。前述の5つの力に加え、キャリアステージが上がるごと

に身についた『自分の能力に合わせた仕事量と質をコントロールする力』『仕事を楽しさに変える力』が加わり定年退職の日がくるまで駆け抜ける所存です。まさしく現在恵泉女学園大学が掲げる『生涯就業力』のモデルになれたら光栄です。

②「温故知新～ AI 時代の人間教育と英語教育の未来にあるもの～」

神奈川県私立中学・高等学校 英語科 M. Kさん (1996年卒業)

教壇に立って18年目を迎えました。現在、高校2年生の担任を務めながら、生徒のキャリア支援に携わり、「人と人との関わり」のなかで仲間と感動を共有し、本物の体験を積む場を提供することに喜びを感じています。今年度は「論理表現Ⅱ」「英語探究」および夏季の「英検準1級対策講座」で、生成AI(ChatGPT)を導入しましたが、英語力の向上には音声指導が不可欠です。母校で学んだ「人間教育」と「英語教育」は、今の私の基盤となっています。

在学中の私は多感で多様な価値観に揺れ動いていました。しかし、大学2年生で出会った大日向先生や岩佐先生の教職課程の授業が、私のやる気に火をつけました。今でも教職教養の全科目のノートを大切に持っています。「教育心理学」や「発達心理学」は、大日向先生の言葉で語られた事実や実験が、私の考えを覆し価値観を大きく揺さぶられたことが記されています。岩佐先生の「教育史」や「教育原理」は、ニールの教育観や人権思想、そしてカリフォルニアのシュタイナーカレッジで学んだきっかけとなった授業です。このノートは今もなお色あせず、私のバイブルのようなものです。

「英語教育」は、教職のオリエンテーションで「これからの『英語の授業』は、今まで受けてきたものとは異なります。」という言葉が印象に残っています。教育実習を経て、教職への「好奇心」が私に「努力」を促し、卒業後に金融機関で働きながら再び英語と向き合うことを決めました。留学資金を貯めた後、岩佐先生の紹介で「未来塾」で英語音声訓練を受けた半年間の経験は、「ことば」の持つ威力を知りました。今も生徒にスピーチや音読、シャドーイング指導の際、呼吸と心と体の調和を意識するように伝えながら、音声中心の指導を心がけています。

卒業から30年、母校で学んだ教えが時代を超えて普遍的であると実感して

います。AI時代の到来で教育方法が進化し、私も「個別最適化と協働的な学び」を融合させたカリキュラム再編に取り組んでいますが、生徒たちの多様な可能性を最大限に引き出せるよう、母校の教えを原動力に、情熱をもって未来を見据えた新たな挑戦を続けていきたいと思います。

### ③「主体的に学び考えることの重要性」

神奈川県公立中学校 国語科 T. Tさん (1996年卒業)

私が教師を目指したのは中学生の頃でした。常に生徒の声を真剣に耳を傾けてくれた恩師との出会いがきっかけです。

恵泉の教職課程ではその神髄を学びました。特徴的だったのは学生が主体的に学び考えるスタイルであったということです。当時の学校教育は教師が主体。そのため学生が主体的に学び考える授業は難しく感じることもありました。

教育実習ではまだ教師主体の雰囲気が残る中で生徒主体の授業を展開するのに苦労しました。しかし国語科主任の先生から「是非とも職員室で隣に座らせた。教師になりなさい。」と励まされたことは私にとって大きな支えになりました。この経験を通して、恵泉での学び方はこれからの教育に必要なアプローチだと実感しました。

卒業後は不登校や学力不振の生徒を対象にした高校で勤務しました。学校が好きだった私にとって、学校に行きたくないという生徒の多さには衝撃を受けました。そのため、作文等を通して自分の気持ちを表現し、同時に相手の気持ちを理解する生徒主体の授業展開を心がけました。受け身だった生徒が自ら考え、新しい発見をし、自分の意見を伝えようとする姿は感動的でした。

現在は地元の公立中学校で学習支援員と不登校支援員として働いています。別室登校している生徒と過ごし、自習形式の授業をサポートしたり、悩み相談にのったりしています。生徒は不安な気持ちを抱えながら別室登校してきます。そのため登校した際には「よく来たね」と声をかけ、勇気を出して登校したことを理解するよう努めます。その結果生徒は次第に笑顔を見せ、自分の気持ちを伝えられるようになり、主体的に学校生活を送るようになります。学校教育は生徒にとって人生の通過点にすぎません。そこで主体的に

考え自己表現することを学ぶことは、将来自分を見失わずに生きるための糧となると私は信じています。

恵泉を卒業して28年たちました。恵泉での教職課程で得た主体的に学び考えるスタイルは私の最大の強みです。年齢と経験を重ね、少しは恩師の背中に近づけたかなと感じることもあります。これからも生徒に主体的に学び考えることの大切さを伝え、生徒とともにありたいと思っています。

#### ④ 「過去・現在・未来に続く恵泉での学び」

東京都公立高等学校 M. Kさん (1997年卒業)

恵泉を卒業して数十年、今回、恵泉での学びを振り返る機会をいただいたことに深く感謝申し上げます。

私にとって恵泉はキラキラした青春時代を過ごした場所でした。大切な友人たちを得た場であり、恩師に巡り合えた場でもあります。しかし同時に、私自身の核ができた場でもありました。現在、再び大学院で研究をしていますが、恵泉で学ぶ楽しさ、喜びを実感していなかったら、学び続けていなかったでしょう。

教職課程についての学びに視点を移すと、教員としての在り方に強く影響を受けていたと感じています。教職課程でお世話になった岩佐玲子先生、西谷さやか先生の厳しくも温かなご指導と、教育に対する真摯な姿勢は、なんとなく教職課程を履修した私に強烈な印象を与えました。人を教育することの責任はただ「楽しい」だけでは成り立たない、けれど、同時に教える楽しさを忘れてはならないというメッセージを受け取りました。

現在、大学院では経営学を専攻しています。教員が、しかも英語科教員が経営学を専攻することに対し、驚かれることも多々あります。しかし、私にはとても自然な成り行きでした。大学時代は蓮見博昭先生ご担当のアメリカの政治経済ゼミに所属していました。蓮見ゼミは刺激的で、毎回、英語の文献を「読まされ」、蓮見先生には「君は本当に英語ができないね」「これは研究とは言わないね」と言われつつも、あきらめずにご指導いただき、自身の成長を実感した場でもありました。ゼミで培った「世の中を平和で豊かな場所にしていく」視点は経営学にも通ずるところがあります。そして、その基盤は組織づくりであり、人づくりであるという現在の研究に紐づいています。

将来的には学校現場を教員が働きやすい持続可能な職場にし、そして楽しんで学べる場にする人材に成長したいと考え、日々研究をしています。

現在、教育現場が置かれている状況は決して楽観視できるものではありません。しかし、恵泉で得た学びとともに、あきらめず歩み進めていこうと決意を新たに、結びとさせていただきます。

#### ⑤ 「世界平和を願って」

東京都公立中学校 英語科 A. Hさん (1998年卒業)

私は恵泉女学園大学を卒業後すぐに東京都の公立中学校で英語科の教師として教壇に立ちました。教師になって四半世紀が過ぎていますが、生徒にどんな力をつけさせたいのか、そのためにはどのような授業をするべきなのかを日々考え、自己研鑽をしながら常に教壇に立っています。

生徒から時々なぜ私が英語の先生になったのかを問われることがあります。道徳の授業などを通じて、私が英語を生徒に教える理由は、世界平和のためであると語っています。

私は高等学校在学中に交換留学でアメリカに行き、約1年間ホストファミリーの家に滞在しました。ホストファミリーにはとてもよくしていただきましたが、初めから皆が快く受け入れてくれていたわけではありませんでした。第二次世界大戦を経験したアメリカ人にとって、日本は敵国であり友好関係を築くに値しなかったからです。しかし、共に過ごす時間の中で、彼らの気持ちに変化が現れ、日本人としての私ではなく、1人の人間として私を見てくれ、いつしか家族の一員として私を受け入れ、愛情をもって接してくれました。

この経験を通して、自分自身が1人の人間として相手を思いやり、心に寄り添える人であり続けられれば、相手も心を開いてくれ、必ず信頼関係を築くことができると確信しました。

恵泉で学んだ平和教育が私の英語教育の真髄にあります。世界平和のために、私ができることは何かを考えたとき、世界中の人と信頼関係を築ける人を育てたいと思いました。なぜなら相手のことを受け入れ尊重し大切にできることが、世界の平和に繋がると考えたからです。生徒には単に教科として英語を学ぶのではなく、世界の人と繋がるコミュニケーションのツールとし

て学んでほしいと願っています。そのため、英語でコミュニケーションをとる中で、人と関わることの楽しさ、共感したり寄り添ったりすることの大切さを生徒たちが実感しながら英語が学べるようにこれからも努めていきます。

⑥ 「『個』と向き合い、『個』を尊重すること」

東京都私立中学・高等学校 国語科 K. Mさん (2000年卒業)

恵泉女学園大学の教育の三本柱である「キリスト教」「自然」「国際・平和」は、私の教師としての土台となり、これが、「個を重んじ、個と向き合う姿勢」を培ってくれた。「国語科」の教師として教壇に立つ以上、授業が最優先されるべきであり、教科の知識は必要不可欠だ。しかし、「知識」だけが身につければ良いというわけではない。教室には、それぞれの「感情」や「背景」を抱えた生徒が座っており、「個」と向き合う姿勢は、授業を行う上でも大切である。自分が知っている「知識」を伝え、披露するだけの「授業」ではなく、「国語の教材」を通して、「私」という人間と、そこに座る一人ひとりの生徒が向き合っているという姿勢を忘れてはいけない。教職の授業を通して、集団における「個」の存在について考える機会をたくさん持った。それぞれの発達段階における経験の重要性やその欠如からくる課題、発達のアンバランスを抱える生徒への「手だて」、各発達段階に応じた接し方、各校種で重視すべきことなど、今、授業やHR経営で実践していることは、この学びがベースとなっている。特に印象に残っているのは、国語科教授法で、大村はま氏の『教えるということ』を課題図書として扱ったことだ。この課題図書を通して、仲間と話し合い、助け合い、課題を見出し、「教師とはなにか」「教師としてどうあるべきか」を考えた時間は、確実に現在の「教員である私」の大切な要素の一つである。

教員として、現場にあり続ける以上、変わりゆく教育現場で、授業内容も教え方も変えていく必要がある。また、時代、生徒に合わせて、関り方を変えていかなければならず、更新すべき知識や実践方法は様々だが、その中でも「自分にしかできない強み」とは何かを考え、それを磨いていきたい。現在、私が実践し、個人的な課題としているのが「平和教育」と「コミュニケーション教育」「発達にアンバランスのある生徒への対応」である。恵泉女学

園大学で学んだ者として「個」を大切に、お互いが大切にできる安心してそこにいることができる「教室という空間」を作り、生徒と共に歩み続ける者でありたい。

#### ⑦ 「言語と語学の違い」

東京都私立高等学校 英語科 M. Hさん (2003年卒業)

私が充実した学生生活を送れたのは、教職課程の学びがあったからだと思います。異なる学部学科の人たちとの学びは、刺激的であり、楽しい日あれば、身の引き締まる日もあり、毎日がジェットコースターに乗っているような感覚でした。多くの授業の中で最も忘れられない授業は、指導法の授業です。アメリカンジョークについて音読し、何が面白いのかを説明するという内容で、夏休み前にその教材1冊が渡されました。初めは、英語の内容は理解できるのにジョークの何が面白いのかが分からず、一生懸命調べ、友人と意見交換をしたことを覚えています。調べたり、話したりしていく中で、言語は語学としての学びだけでは理解できないということに気がきました。また、言語には文化背景があり、その国のことを知らないと言語を習得したとは言えないのだということも学びました。言語には人が必ず存在していて、教材のみで分かろうとしても本当の学びにはならないという面白さがそこにありました。

いま、私は高校教員として日々生徒たちと向き合い、過ごしています。恵泉での豊かな環境（自然、仲間、教授陣、施設など）の中でのさまざまな学びで得た感覚や気付き、知識などを生徒たちに伝える努力をしています。昨年度からは、2年生の必修選択授業である「異文化探究」を担当しています。生徒たちと共に、異なる文化を持つ人々が協調、共生していくために必要なことを探る授業です。朝鮮高級学校やブラジル人学校へ直接訪問したり、街頭インタビューしたり、自分の見方や価値観を相対化し、異文化を捉え直すことが目的です。生徒たちが無意識の差別を認識しショックを受け、隣に座っている友人の文化背景を知り感動することは教材で学ぶことはできません。生徒それぞれが、人と人が出会うことで学べることに戸惑いながら探っていく姿に私は喜びを感じています。これからも、恵泉で培った学びを活かし生徒と共に学び続けることでより楽しい教員生活を過ごしていきたいと思って



います。

⑧ 「たくさんのきっかけをくれた恵泉」

神奈川県公立高等学校 英語科 H. Kさん (2003年卒業)

私は、高校を卒業して、1年遅れで恵泉に入学しました。理由は、高校を卒業時にすぐにいろんな事を決められなかったのと、将来に対する進路の知識が圧倒的に少なかったからです。高校卒業後の1年間はアルバイトをしたり、模試を受けながらいろいろ考えて、恵泉に進学することを決めました。決め手は少人数で学べるところと、海外に目が向いているところ、でした。

入学してからは、自分の学科以外の授業も非常に興味深く、哲学や多文化共生など、学科を超えているような授業から学びを得ました。そして、もし大学に入学できたら必ず教職課程を取るという目標があったため、教職課程を取りました。実際に当時は、教職に就くかどうかの部分は漠然としていましたが、恵泉で学んだ教職課程の内容の中に、今もなお心に残っている活動があり、その活動は英語の劇『走れ！メロス』でした。英語での台詞を覚えることもしかり、練習も何度もしたことを覚えています。あの時の連帯感や、練習後の暖かい空気、授業後の夕焼け、先生のお話や手品は今でも心に残っています。そしてここで出会った親友は今でもかけがえのない存在です。

私は恵泉を卒業後、2年間ソウルに留学し、帰国後は語学を生かして一般企業の海外事業本部で働いていましたが、一念発起して教職の道に飛び込みました。現在、勤続16年目の中堅教諭になります。

恵泉を卒業するとき、岩佐先生からの「Kさんは、一度ぜひ社会に出てみてから、教職を目指してください」という言葉もとても心に残っていました。よく『教師は世間知らず』と言われるそうですが、一般企業を経験した自分はいつでも世の中の流れや常識にアンテナを張ることができている気がします。

先日のリユニオン in 多摩で、20数年ぶりに恵泉多摩キャンパスを訪問しました。多摩センターの駅に下り立ち、スクールバスに乗ったら、懐かしさと共に恵泉で学んでいたころの夢や、課題を必死でこなして通っていたことなど、いろんな事を思い出し涙が出ました。美しい母校が無くなってしまうのはとても悲しいですが、恵泉で学んだ事や恵泉の景色は一生忘れません。

恵泉で出会ったものすべてに、心から感謝を申し上げます。

⑨ 「生徒との関係を深めるコミュニケーション力と教育者の責任」

東京都公立中学校勤務 英語科 A. Kさん (2009年卒業)

私は、現在多摩市の中学校で産休代替として勤務しております。公立学校での勤務は3年目となります。

恵泉女学園大学の教職課程での学びを通じて、教育者としての最も大切なスキルの一つが、生徒との関係を深めるためのコミュニケーション力であることを強く実感しました。この能力は、生徒の学習成果や心理的成長に大きな影響を与えます。多様な背景を持つ生徒たちに対して、個別のニーズに応じた指導を行うためには、相手を理解し、信頼を築くコミュニケーションが不可欠です。恵泉女学園大学の教職課程では、毎週小学校での担任の先生の授業サポートや特別支援学校等でのボランティア活動を通して、特別支援教育についても学ぶ機会があり、これにより、すべての生徒が安心して学べる環境づくりに貢献する力が身につきました。これらの学びを通じて、恵泉女学園大学での教職課程は、教育現場で実際に役立つコミュニケーションスキルの習得に非常に有効であったと感じています。

恵泉の教職課程を通じて得たもう一つの成果は、教育に対する情熱と使命感です。学生を育てるという職業が、単なる知識の伝達を超えて、人格形成や未来の社会に貢献するものであることを理解しました。この過程で、教育者としての責任を強く感じるようになり、教育現場での実践を通して、その責任をどのように果たしていくべきかを学びました。また、教育者としての学びは終わることがないということも実感しました。常に新しい教育理論や技術を学び続けることが求められ、また、自分自身の成長が生徒の成長に直結することを学びました。このため、自己研鑽の姿勢を持ち続けることの重要性を認識し、日々の学びを大切にするようになりました。

恵泉女学園大学の教職課程を通じて得たこれらの学びは、教育者としての成長に大きく貢献するものでした。これからも教育現場で、これらの知識やスキルを活かし、さらに自己研鑽を続け、より良い教育を提供していくことを目指します。

⑩ 「恵泉で学んだ大切なことを伝えていきたい」

東京都公立中学校勤務 英語科 S. Kさん (2011年卒業)

恵泉で学んだ4年間は、私の人生の中で大切なことを教えてくれた貴重な時間であり、宝物だと思える日々でした。様々な経験をさせていただいた恵泉には感謝の気持ちでいっぱいです。恵泉の教職課程で学び、これからも大切にしていきたいと思っていることが主に2つあります。

1つ目は「新しいことにチャレンジすること」です。私は学生時代、自分から発言をしたり、人前に立ち話したりすることが苦手でした。恵泉に入り教職課程に進むことを決め、先生方の元で学び、小学校で教職を体験させていただく経験をし、その他にも同じ仲間と活動をする中で、自分は苦手だと思っていたことは避けてきただけで嫌いなことでは無いことに気が付きました。恵泉の授業は実際に声に出して体験する場をたくさん与えてくれました。この体験が私を成長させてくれたのだと思います。新しいことにチャレンジすることは新しい自分に出会うことができ、人生をより豊かにしてくれるのだと実感しました。

2つ目は「感謝すること」です。教職の授業では、生徒一人一人が語り、それを皆で共有する時間がたくさんありました。自分が思っていることを言葉にして発言することと、仲間が感じていることを聞くという経験させていただいたおかげで、普段から何気なく生活をしている中に大切なことがあり、相手を思いやって接することで平和が生まれるのだと考えるようになりました。当たり前のことかもしれませんが、それがどんなに感謝すべきことなのかと気づかされました。

私は中学校の教員として働き、10年ほど経ちます。この恵泉で学んだ2つのことを、生徒によく語っています。これからも自分がこれまでに経験してきた大切なことを、生徒に伝えていきたいです。また教員として、恵泉で私が成長することができたように、生徒が安心して挑戦できる環境、声を発することができる場を作っていきたいです。そのためにも自分自身いくつになっても学ぶ姿勢を忘れず、新しいことを受け入れ、チャレンジできる人間でありたいと思っています。

⑪ 「きっかけ」

埼玉県公立特別支援学校 国語科 Y. Sさん (2020年卒業)

教職課程のことを振り返ると当時の私は授業数や課題は多い、漢検はなかなか受からない、実習は緊張しちゃう、とネガティブな気持ちが多かったなと思います。辞めたいと思ったことが何度もありましたが、なぜだかやめる勇気が出ずにいたのでそのまま続けていました。

続けていると未来が変わるきっかけに出会いました。それは介護等体験で特別支援学校で2日間の実習へ行ったことです。初めて障がいのある子どもたちと関わり、たった2日間でしたがとても充実した実習となりました。実習後に漠然と「この子どもたちのためにできることはないかな」と考え、自分なりにその思いを将来に繋げようと思いました。就職の時期ということもあり一般企業へ就職するか教員の道へ進むか悩みましたが「放課後等デイサービス」という特別支援学校へ通う児童生徒が利用できる通所型福祉施設があることを知り、そこで働くことに決めました。

介護等体験に行かなければこのような選択肢に出会うことはありませんでした。3年生まで続けたから選択肢が増え、その先の見通しを持ち、つらいというネガティブな気持ちももう少し頑張ろうという活力になっていたと思います。この経験が今でも私の背中を押してくれています。何度もやめたいと思った私にやめる勇気がなくてよかったと思います。

卒業後は、新卒で放課後等デイサービスに4年間勤めました。4年の間も何度も転職を考えましたが、またもや辞める勇気がでませんでした。その間の有意義な時間に後悔したことはありません。そしてあるきっかけがあり、転職することを決意し、現在は、特別支援学校の教員として働いています。実習生として行った特別支援学校という場所に今は教員として務めることができることが嬉しく、日々学びの多い充実した日々を送っています。

教職課程はただ免許を取得するだけでなく、自分自身と向き合い、自分の将来について考え、行動する、大切な時間でした。そう思えるのはあのとき頑張った自分がいるからです。あのときの自分に拍手を送りたいです。そして自分がおばあちゃんになって人生を振り返ったときに拍手を送ってもらえるようにこれからの時間を過ごしていきたいと考えています。

⑫ 「大切にしていること」

東京都公立中学校勤務 国語科 I. Aさん (2021年卒業)

恵泉の教職課程では、専門科目の知識や教職に関する知識はもちろん、教師に必要な心構えを学ぶことができました。教員として働き始めてから絶えず大切にしていることは、何よりもまず生徒を愛するという事です。中学生という大人と子どもの狭間にいる彼らは、社会通念上の「当たり前」につまずき、悩んだり失敗したりします。そのときに、生徒に一番近い存在である教員として、生徒の一番の理解者でありたいと思っています。どんなことがあっても、一番近くで最後まで生徒を信じ、受け入れることで愛を伝えていきたい、そんな気持ちで働いています。

現場では毎日様々なことが起こり、目の前のことに必死できちんと時間をとって生徒と向き合うことができなくなってしまうこともあります。また、自分自身の知識不足や経験不足から失敗したり自信をなくしたりすることもあります。そんなときにふと思い出すのは、恵泉で過ごした日々です。私が教職課程を履修していたときは、同じ学科の同級生がおらず、先輩や後輩が模擬授業を受けてくれたこともありました。試験やレポート提出など多忙な学校生活の貴重な空き時間を私のために使ってくれたことを今でも感謝しています。また、4年次には新型コロナウイルスが流行し大学に通えない日々が続く中で、先生方や職員の方々が、教育実習や教員採用試験のために親身になって支えてくださり、すべてを無事に終えることができました。恵泉で出会った教職員の方々、友人や先輩、後輩の存在がいつも背中を押してくれています。

現在は中学3年生の担任をしています。初めての進路指導を控え不安もありますが、生徒の声に耳を傾け真摯に向き合っていきたいと思っています。また、公立学校に勤めているので異動することもあります。異動した先々でたくさんの中学生と出会い、その一人ひとりに愛情を込めて接していきたいと思っています。

⑬ 「教員として成長するために」

東京都公立中学校 英語科 N. Tさん (2022年卒業)

恵泉女学園大学で教職課程を履修し、岩佐先生や、水上先生をはじめとした多くの先生方、そして一緒に切磋琢磨した仲間がいたからこそ、今こうして教員生活を送ることができています。お世話になった皆様本当にありがとうございます。さて、ここからは特に印象深かったことについてお伝えしたいと思います。

まずは、岩佐先生に教えていただいた、「教職あいうえお」です。これは今でも私にとって大切な合い言葉です。特にあいうえおの最後「お」「お礼とお詫び何より先に今すぐに」はとても大切なことです。学校では、保護者への報告やお礼、お詫びは欠かせません。たった一言伝えるか伝えないかで信頼関係は大きく変わっていきます。お礼とお詫びは、人と関わる上で必要不可欠なことでありますが、意外とあたりまえすぎて忘れてしまったり、いい加減になってしまったりします。だからこそ、こうして合い言葉として覚え、実践することで、より良い人間関係を築くことができると実感しています。これからも、この合い言葉を実践すると共に、生徒にも伝えていきたいです。

また、神山先生の言葉も印象的でした。「失敗したらすぐに反省。3秒後には次のことを考えて前に進むのよ。」です。学校での勤務は流れるように進んでいきます。私が失敗しても、落ち込んでいる暇はありません。嫌でも、傷ついても流れに乗っていかなければ、生徒も一緒に転覆してしまいます。だからこそ、反省はその時に行い、先を見据えて次へ動くことが、失敗しない一番の方法だと痛感しています。これからも、今までの経験を糧に強く前に進んでいきたいと思います。

恵泉女学園大学の教職課程では様々なことに挑戦させていただきました。今後は教員として、今とは違う環境で教員になったり、自分の英語力を改善したり、様々なことに取り組んでいきたいと思います。

## 7. おわりに

2007年3月に発行された『恵泉の教職課程』には、本学教職課程が目指してきた教師像について以下の様に記されている。

それは、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」という聖書の教え「隣人愛」の精神に基づいた、何事にも愛をもって取り組む教師であり、同時に、どのような場にあっても自分に与えられた仕事や役割を通して世界の平和に貢献しようとする「奉仕者」としての教師です。一人ひとりの子どもをありのままに肯定的に受容し、その幸せと成長を絶えず祈り、共感的な立場からその子どものために骨身を惜しまず「させていただく」という感謝の心で最善を尽くそうとする教師。そのような受容と祈りと感謝を実践できる教育者の育成を本学教職課程は目指して参りました。(p.2)

今回寄せられた13名の現役教師として活躍する卒業生たちの文章からは、それぞれの教育観の基盤に、恵泉女学園大学の理念と本学教職課程での学びがしっかりと根付いていることが読み取れる。

特に、教科に関する知識や教える技能への研鑽への姿勢はもちろん、積極的に個々の生徒を理解し、その将来の方向性を洞察しながら一人一人に愛情をもって寄り添いたいという奉仕者としての強い意欲が感じられる。また、世界や社会の変化に対して柔軟に対応し、学び続ける存在であろうとする研鑽への熱意も文章に表れている。さらに、生徒が安心できる環境を整えるために、生徒に寄り添い、共に課題解決に当たろうとする、人としての真摯な姿勢もうかがうことが出来る。

恵泉での学びを礎として次の世代の成長を支援する教育に当たる卒業生の姿は、「平和を創る女性の大学」としての教育の真価を証明するものである。

今後の本学教職課程の課題の一つは、これまでの卒業生が体現してきた教育者としての愛と奉仕の精神や、教師としての高い専門性を、どのようにして現在履修中の在学生に伝えるかであると言えよう。在学生が教員免許を取得するまでの学びの過程はもちろん、教職に就いた卒業後も上級生とのつながりを確保し、研鑽の機会を共有できるよう、在学中から環境を整えることも重要な課題であると考ええる。

#### 参考文献

- 河井道 (1968) 『わたしのランタン』 恵泉女学園  
KAWAI, Michi (1939) *My Lantern*. Tokyo, Japan

惠泉女学園大学 HP 「教員免許状（中学一種、高校一種）取得人数一覧」 [https://www.](https://www.keisen.ac.jp/career/license/pdf/teacher_license2022.pdf?220513)

[keisen.ac.jp/career/license/pdf/teacher\\_license2022.pdf?220513](https://www.keisen.ac.jp/career/license/pdf/teacher_license2022.pdf?220513)（2024年9月22日閲覧）

惠泉女学園大学教職課程委員会（2007）『惠泉の教職課程06』

文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成29年告示）

文部科学省（2018）高等学校学習指導要領（平成30年告示）